

マノアタリ 伝統工芸士とのセッションでうまれるうつわ

子供たちがスマートフォンやタブレットなどを勉強や遊びに使いこなしているのを見ると、すごいなあとも感心してしまいます。自分の子供の頃を振り返ると色々なものを勝手に作って楽しんでいました。中でも一番に思い出すのは目玉焼き作りです。最初は言われた通りにしていたのですが、ハムを敷いたり火加減を変えたりとアレンジし、どうしたらもっと上手にできるか、母より美味しくなるのかを考えるのが楽しくなってきたことを覚えています。その時間が自分で考え工夫することの楽しさを知る良い機会だったと思います。便利になった今、そんな機会が減っているような気がします。工芸に携わっていると工夫することの楽しさを日々感じるすることができます。多くの皆さんに私と一緒にセッションするのによきもの作りにチャレンジし、職人の息吹や手捌きを五感で感じる時間を共有し、オリジナルのうつわを完成させたいと思います。

京焼・清水焼における主要な成形技法の一つがろくろ成形です。ろくろの回転を利用して粘土をスムーズに伸ばし、形を作ります。土揉み3年ろくろ10年と言われるくらい時間をかけて少しずつ技術を習得していきます。また、粘土をペースト状に水で溶いたものを袋から絞り出して描画する「いっちゃん」は京焼・清水焼の伝統的な技法の一つです。切り替えを音で表現するために高音が鳴る土を無数の原料から経験で選び、モチーフの火打石の火花を表現するために灰や薬を使って火色を発色させ、古くからの遊び心を形に取り入れる。1つのモノを作るのに様々な角度から取り組んでいく。「特別を作る」京焼らしさを感じていただければとても嬉しいです。

https://www.instagram.com/shinichi_takashima/

カチカチッチ

現代の生活の中では仕事とプライベートの境目がなくなっていると気が付くことがあります。コロナ禍でのリモートワークでもそうでしたが、自宅に仕事を持ち込むとなおさらです。僕自身、自宅兼工房という環境でプライベートと仕事の境目があいまいな中で気持ちを切り替えて集中することはとても難しいことだと感じています。通勤時に少しずつ仕事モードになっていく人、仕事場という空間で仕事着に着替えて半ば強制的に切り替わる人、いつも決まったルーティーンや音楽などで集中していく人。僕のように火打石をカチカチしてみる人。またそもそも切り替わらない人。それぞれのやり方でプライベートと仕事の切り替え方法があると思います。なかなか難しいと感じる「切り替え」を何かきっかけになるものや助けてくれるものがあれば集中モードに入っていけないか？陶芸で自分の背中を押すものが作れないか？そこで「スイッチを切り替える」そんなものを作ってみました。

ものづくり(技術・伝統など)視点での解説・補足説明 京焼は特徴がないのが特徴といわれるほど技術や技法が多彩です。古くからの都として「お誂え」の需要があったことが理由です。その土地でとれる原料に適したやり方、その土地で必要とされる形…ではなく使う人が欲しい形、使う人が満足するモノを作ってきた歴史があります。その伝統が物づくりにおける京焼の特徴の一つです。切り替えを音で表現するために高音が鳴る土を無数の原料から経験で選び、モチーフの火打石の火花を表現するために灰や薬を使って火色を発色させ、古くからの遊び心を形に取り入れる。1つのモノを作るのに様々な角度から取り組んでいく。「特別を作る」京焼らしさを感じていただければとても嬉しいです。

<https://shibatagama.jimdofree.com/>

ことばこ (言葉箱)

表紙買いたまま読まずに積み上げられていく書籍たちをいかにして読む気にさせるか…スマホがあれば何でもできてしまう現代のデジタル社会に取ってアナログな方法で「格好良いフレーズを蒐集して自分好みのフレーズ集を作る」という解決策を考えた。どのようなものも簡単に手に入る現代日本であっても、フレーズだけを蒐集するための入れ物が見つからない。それなら自らの手で、桐箱職人の技術をつぎ込んでフレーズ専用桐箱を製作してみよう。思い返してみれば、昔から桐箱には当たり前のように大切なもの、貴重なものがしまわれていた。桐箱を使うという文化は廃れたが、貴重な器や大切な子供のへその緒や抜けた乳歯は未だに桐箱に収められている。「大事なものを桐箱にしまう」という所作は千年以上続く日本の文化であり日本人のDNAに刻まれた知恵だ。心に響いた本のフレーズも、憧れた偉人の台詞も、おじいちゃんが遺してくれた大切な言葉も、形はなくても大事なものだからこそ桐箱にしまって、時には飾ってみたい。

美術木箱小島は一般的な桐箱のほかに、文化財指定されている美術工芸品の保存に特化した桐箱を職人の手で製作しています。国の宝に相応しい良質の桐丸太を調達し、昔ながらの技法と工具により製作した桐箱は数百年後も文化財を守り続けます。本作品も同様の桐材と技術を使っており、低品質な中国産桐材を機械加工して大量生産された巷に溢れている桐箱とは一線を画しています。フレーズを書きこむ桐板は高級桐箱の盛蓋と同じ加工を施して品を良くしています。覆輪には桐と相性の良い黒柿や桑でなくピンクアイボリーという唐木との珍しい組み合わせを試みました。フレーズを飾る仕組みは、保存を目的とした従来の桐箱に新たな役割を与えた画期的なシステムではないでしょうか。

https://www.instagram.com/kojima_kibako/

輪廻金彩

家にある古びれたインテリア、使い古した財布、それらには人の数だけの思い出が寄り添っている。手放すには惜しいと思うほど愛着があるものも少なくはない。それらを新たに生まれ変わらせる。「京友禅の金彩技法により古きモノに新たな命を」金彩加飾により新たに生まれ変わった商品を思い出と共に楽しんでいただければ幸いです。

田中金彩工芸は開業から100年近い歴史を持つ老舗の「京友禅 金彩工芸」を営む工房です。加飾技術として特化した金彩技法は常に着物に上品な華やかさを与えてきました。金彩加工は絹以外の布、和紙や木材への加工が可能です。特に今回は普段使用している定着剤ではなく、木材やレザーに独自の定着剤を開発、それを使用して加工を施してあります。木材や普段使っているレザーの小物に立体感を演出するこの技法は、新たな表現方法の一つだと考えています。

美術木箱小島は一般的な桐箱のほかに、文化財指定されている美術工芸品の保存に特化した桐箱を職人の手で製作しています。国の宝に相応しい良質の桐丸太を調達し、昔ながらの技法と工具により製作した桐箱は数百年後も文化財を守り続けます。本作品も同様の桐材と技術を使っており、低品質な中国産桐材を機械加工して大量生産された巷に溢れている桐箱とは一線を画しています。フレーズを書きこむ桐板は高級桐箱の盛蓋と同じ加工を施して品を良くしています。覆輪には桐と相性の良い黒柿や桑でなくピンクアイボリーという唐木との珍しい組み合わせを試みました。フレーズを飾る仕組みは、保存を目的とした従来の桐箱に新たな役割を与えた画期的なシステムではないでしょうか。

<https://tanaka-kinsai-craft.com>

きみの絵織

お子様が描いた“今”の瞬間を残してほしい、家族の絆を大切にしてほしい、という思いからきみの絵織は生まれました。First artやお誕生日記念の絵などお子さまの絵を、京都の伝統工芸である西陣織の生地に織り込んでいきます。お子様と一緒に今を楽しんでいただいた後、未来の大人になったお子様への贈り物として今から未来へとつながります。また、アートのまま残しておくだけではなく、形を変え、ご活用いただけるのも魅力の一つです。

きみの絵織に使用している生地は、真珠箔で製織しています。真珠箔とは、長い歴史の間に寵愛されてきた「真珠」を、箔にして織り込みたい一心から特殊製法を完成させ、特許を取得し商標も獲得した、浅山織物の製法です。箔に真珠の粉をふんだんに敷き詰め、約1ミリ幅に裁断し緯糸として織り込んでいくという高度な技術で織り成します。自然界が生み出した、真珠箔の光沢をぜひお楽しみください。

Asayama Orimono
浅山織物
Misa Asayama
浅山美紗
<https://asayama-orimono.com>

Sunset Voice

一日の終わり、綺麗な夕日が心の疲れを癒してくれます。その夕日も季節によって表情が違うのをご存知でしょうか？力強いオレンジ色や透き通った優しいオレンジなど、ほんのひとときだけの優しさを与えてくれます。でも、日々仕事などに追われがちな日常の中、そんな素晴らしい自然の魅力を感じる事が遠くなっているのではないのでしょうか？このSunset Voiceは、夕日を見ながらワインを飲んだり楽しむ時にくりとスティックで撫でてみると優しい声が聞こえてきます。曇りの日にはローソクを灯すことで夕日をイメージしていただけます。

古来から残る石灯笼は、折りを捧げる火を灯す「灯の籠」です。石工である私は、伝統的な道具であるノミや石頭(せつとう)などを使い、力を抜いた独自のリズムでコンコンと音を立てながら硬い石を削っていきます。冷たく重いイメージの石を、時を経て風化した柔らかい石のように感じさせるエイジング加工は齋田石材店で代々引き継がれてきたものです。灯笼作りの副産物でもある硬い石に繊細に刻まれたスリットからは、夕日の時間ならではの自然の優しい声が聞こえてきます。

Saida Sekizai
齋田石材店
Takaaki Saida
齋田隆朗
<https://saidasekizai.com>

みえすぎず。さえぎりすぎず。

一人一人のプライバシーのレベルは違うけれど、今の世の中には「見せるか、見せないか」の二択しかないように感じる。断絶され過ぎず、開放され過ぎず、絶妙な心の距離感が欲しい環境で、心の落ち着きや自分だけの空間を作れないか…。仲間との時間をより特別なものできないか…。そんな問いに対するヒントは、古来より結界として使われていた御簾にありました。京都産の真竹。様々なバリエーションから選べる竹と編み糸の色。幅広く対応可能なサイズ。現代のライフスタイルでこそ生きる、「ありそうでなかった距離感」を提案します。

寛政年間に創業した「みす平」は京都で代々、御簾を作っています。御簾は古来より神様と人間界との結界として使われており、また住まいの間仕切りとしても使用されていました。良質な材料選びから完成まで、修行を積んだ職人の手技を大切に、御簾作りを受け継いでいます。今回提案する新しい結界でも、竹を1本ずつ手で編んでいき、節をずらしながら模様をつけていきます。また、竹の表と裏を交互にすることで、どちら側から見ても同じように見えるよう工夫しています。

Kyoto Misuhei
京都みす平
Heishiro Maeda
前田平志朗
<https://kyoto-misuhei.com/>

